「カインの末裔」の構造について

山田俊治

「カインの末裔」[1]（大正六年七月『新小説』）発表当時、この作品を作者の生活とは無縁な客観的な対象を描いた作品とする評が支配的であった。[2]それに対し、有島は「自己を描出したに外ならない『カインの末裔』」（大正八年一月『新潮』）という「処女作」を顧た一文で反論し、その虚構性を主張した。この自作解説は、「カインの末裔」を論じる上で必ず引用されながら、いまもって作品との明確な照応関係が確立されているとはいえない。従って、西垣勤氏の「自註に従って読もうとしても無理が多い」[3]という問題提起も素通りされてきた。勿論、作品の読みが作者の解説によって拘束される必要はない。しかし、この作品をめぐる様々な先入観を排除するためには、まず作者の表現の意図を自註によって確認し、作品を本来の形において捉える必要があろう。この論稿では、自註に基づく作品の構造を明確にし、あわせて作者の造形意識をも抽出しようとした。

一

主人公仁右衛門を特徴付ける表現に、「野獣のやう」という修飾語が指摘されている。[4]この表現は、「子供らしく」「白痴（ばか）のやう」などと相俟って彼が無意識の領域にあって、本能の赴くままに行動する野性的な人物であることを強調している。主人公は「野獣のやう」な強暴な自然性に生きる形象であったといえる。そんな彼は自分の飢えを癒すために赤坊の僅かな食糧を奪い（一章）、やっと借りた金を妻から掠奪し遊興に使い尽す（二章）。こういう傍若無人な振舞いが描かれ、さらに三章では佐藤の妻との嗜虐的な性愛が描き出され、主人公の野蛮な自然性のままの姿は、強烈な印象を与える。[5]そこに読者は「自己の『本能』の代償的顕現」を見出すかもしれない。しかし、この読者の反応を作者にも適用し、有島の実生活での「抑圧された欲望を充足させる」[6]ための仮想表現と、この主人公の形象を捉えることができるだろうか。むしろ、それらの場面は、それほどのリアリティを獲得したということであって、それを造形した作者の側では、主人公の野人的な性格に自己を投影させるよりも、作品を構成する機能として把握してい

たと思われる。

有島は、自註において主人公の形象を、

茲に一人の自然から今掘り出されたばかりのやうな男がある。而も掘り出された以上は、それが一人の人間であつて、その母胎なる自然と嚙み合はなければならない運命を荷ふと同時に、人間生活に縁遠い彼は、又人間社会とも嚙み合はなければならない。

と説明している。主人公は「自然から今掘り出されたばかりの」自然性を体現する人物であり、そして「一人の人間」であった。これらの属性は、ここではそれぞれ人間社会と自然との関係を提示しているのである。つまり、その野生のままの自然性が人間社会と抵触し、「一人の人間」であることが自然との耕作を通した関係を荷うという二面性として示されているのである。作者の認識では、この関係の二面性を具象化する形象として主人公があった。その意味で、仁右衛門の自然性は社会との関係を浮び上がらせる契機なのであった。

では、その関係とは彼の野性に「最も人間らしく強く赤裸々に生きて行かうとする primitive な人間」を予想し、「最も非人間的に生きて居る利口な人間」の社会を批判的に照射するものであったろうか。この南部修太郎の評[7]には、従来この作品に批判的意図を定立しようとする様々な試みの原型が印されている。それは、次のような自然との関係を根拠に想定できるものであった。

耕き起される土壌は適度の湿気をもつて、裏返るにつれてむせるやうな土の香を送つた。夫れが仁右衛門の血にぐん〳〵と力を送つてよこした。（三章）

こうした自然を相手にする仁右衛門と、「彼れの前にあるおきては先づ食ふ事だつた」（五章）という彼の自然性が強調された部分を、人間の究極的な生の論理として連絡させることで、自然を力の源泉とする人間の原初的な姿を伝える人物と、主人公を捉えたのである。さらに、三章のこの場面の延長にある、情人である佐藤の妻を待ちうける場面で、自然と交感するかのような仁右衛門の描写[8]を、社会への反抗の拠点と見なすのである。つまり、仁右衛門の自然性に人間の本質を見て、社会を追われた彼が、その母胎の自然に回帰し、その関係を拠点として彼を追放した社会を批判するという造形意識を想定したのである。

この見解では、作者が主人公に体現させた関係は、自然と社会との二側面を別々のものとしてではなく、一連なりのものとして理解されている。しかし、この自然との関係は、本来自然を一体化の対象となしえない主人公が、最も安定した関係に充足できた時期を提示し、四章以降の自然との関係の変質を際立たせる役割を演じたとも考えられる。こうした主人公における自然との関係は後述するが、ここでは、社会から追われた苦痛が自然によって慰藉され、彼を抑圧する社会を批判しえたかという問題を考えてみよう。この問題について佐藤勝氏は、宮島資夫の「坑夫」（大正五年一月、近代思想社刊）との比較対照を通して「自然を根拠とする社会への抵抗とも、逆に社会を根拠とする自然への抵抗とも異った人間という座標軸の上に仁右衛門はいる」と結論している[9]。確かに、「坑夫」では、主人公石井金次が鉱山仲間から裏切られ苛

立った心情を、自然の中での酒宴によって慰められるという描写があり、社会と自然とを有機的に関連させる構成が見出せる。原初的な人間性を付与された主人公を、社会は排斥し、仲間の手で圧殺されるという作品構造に、対社会的な批判意識は明瞭である。

しかし、仁右衛門の場合、三章での自然との関係は、彼が社会から擯斥される以前の「凡てが順当に行った」時期を象徴する出来事であった。それゆえ「三年経った後には彼れは農場一の大小作だった。五年の後には小さいながら一箇の独立した農民だった。十年目には可なり広い農場を譲り受けてゐた」という夢が実現できると考えられたのである。この夢は、その自然性を他の小作人に優位した力として、「既存の社会もしくは社会秩序」（佐藤勝）に沿って思い描かれたものである。彼は自然に拠って生きる原初的な存在であるより、社会の内側で生きる体制内の人間であった。仁右衛門にとって社会が「敵」と意識された（一章）のは、彼が社会から離脱していたからではなく、その人間的な夢が妨害される危険を感じていたからであった。しかし、「敵」はまだ弱く、彼は社会の階層を上昇する可能性を確信できた。そんな彼に、慰藉の対象となる自然は必要なかった。この主人公に、自然に回帰して社会を批判的に対置する機能を仮想することはできない。仁右衛門の自然性は、社会と自然とを繋ぐ媒介にはなりえないのである。このように、自註で彼が荷ったとされる二面性は、作品形象の上でも切れた関係として造形されていたのである。

先に引用した自註の説明に続けて、有島は、

彼は人間と融和して行く術に疎く、自然を征伏して行く業に暗い。

と、主人公の形象が社会と自然との関係で否定的であることを明示している。社会との関係で、仁右衛門の自然性が否定的であるという端緒は、すでに三章の当該箇所にも指摘できるのである。順調であった彼が、その自然性を発揮すればするほど、小作人社会からは「まだか」と仇名され、恐れ憚られる人物になっていった。この社会に適合できない関係を作り出した要因こそ、彼の野人的な自然性に他ならなかった。つまり、それは社会との否定的な関係を招来させる契機として機能していたのである。このように主人公は、社会を生活の基盤として、人間的な夢を追求するが、その過剰な自然性ゆえに、所属する社会に適応できず、自らの夢を頓挫させるという形象であった。この彼に否定的な契機として内在化させた自然性を、「人間らしさ」と肯定しても、作者有島の意図とは背離するだけであったろう。また、作中の自然を軸に、さらに主人公の造形について見るならば、彼を「自由人の典型」[10]と規定することも躊躇されるのである。

二

この作品に描かれた自然は、苛酷であり、読む者を圧倒する。多くの評家は、何らかの形で作中の自然に言及している。同時代の田中純は、主人公と自然との相関を「あの自然から切り離してあの主人公を想像することが出来ない」[11]とまでいう。この自然は橋本直久[12]、西垣勤、内田満[13]、宮野光男[14]の諸氏によっても注目され、中でも内田満氏は、自然を単なる背景と見るのではなく、「主人

公を〈追ひつめ〉る役割を分け持っている」と作品内部の機能の上で把握した。こうした役割を持つ自然と主人公との関係を考察しようと思う。

仁右衛門と妻とが赤坊を背負い、痩馬を曳きながら登場する作品の冒頭、彼らを迎えたのは「風に歯向ひながら黙つたまゝ突立つて居」る蝦夷富士(ペケレベツ)の姿であった。冬が迫った原野の光景は、荒涼と広がっていた。しかも、それは主人公達の意志を拒絶して沈黙していた。この人間を拒否した自然の様相は一章末尾にも彼らが寝鎮ったのを見すましたように、

遠慮会釈もなく迅風は山と野とをこめて吹きすさんだ。漆のやうな闇が大河の如く東へ東へと流れた。マツカリヌプリの絶巓の雪だけが燐光を放つてかすかに光つてゐた。荒らくれた大きな自然だけがそこに甦つた。

と描かれる。この「大きな自然」は、人間とは異質な、対立的な次元にある実在と捉えられる。それは、作中の人間と同様の存在感をさえ感じさせる。この外在的な自然を北海道の厳しい環境という具体的なものに還元する前に、次のような有島の自然認識の問題として捕捉してみよう。

固より彼れは自然とも戦ふべきものだと云ふ事を忘れて居たのではない。然し彼れは人間と自然とを離して考へて居た。人間の理解から孤独となる事が自然と離縁する事にもなるとは思はなかつた。彼れはその瞬間まで人間から失つた所を自然から補はせる事が出来ると思ひ込んで居たのだ。

これは、大正三年八月『白樺』所載の「幻想」という短編の一節である。「彼れ」が、散歩の途中、大水の跡に出会い、「自然の力の大きさと強さ」を感受した後の述懐である。

この以前、自然に「調和あるもの」を想定して、人間を「調和を破る」ものと規定する[15]、自然中心の批判意識を有島に見出すことができる。当然、その自然を人間に優位させる認識は、自然に親和し、そこに慰藉を感ずる有島自身の心性を支えとしていた[16]。しかし、この「幻想」に表出された認識には、そうした自然との蜜月が過ぎ去った喪失感が刻印されている。たとえ人間から孤立してもその失意を自然から取り戻すことはできず、逆に依拠した自然から脅威を感ぜずにはいられない、という自然概念の変質をここに看取できる。有島は、意識にとって客体である自然を、そこに一体化し、充足しえない対象として認識したといえる。つまり、「自然とも戦ふべき」という言葉によって、自然を対立的な実在と捉えたのである。こうした有島の自然認識は、次のような自註の表現に端的に示されていた。

自然といふ大きな力は、私達はそれを如何に征服し、如何に共和し行くべきかをはつきりと知る事が出来ないで、常にその間に模索の生活を続けてゐる。それは痛ましい人生の葛藤の一つだ。

このように作品解説の部分を書き出した作者が、作中の自然に仮託した意味は明らかであろう。有島は、作中の自然を単なる背景とはしていない。それは、「痛ましい人生」を象徴するものであった。この自然の意味については㈢で作中の自然の機能として取上げるが、作者の人間と自然とを峻別する認識は、主人公と自然

との関係にも指摘できるのである。冒頭から自然は主人公夫婦とは没交渉な、彼らの意志を拒否した実体として描かれていた。主人公にとっても自然は回帰できない「大きな力」に他ならなかった。こうした形象のあり方を見れば、彼に自然を根拠に社会を批判するという関係は仮想できないのである。

この主人公と自然との対立的な関係は、仁右衛門が「一人の人間」であることに由来していたといえる。彼の野性を人間的な本質と見なすと、「其人間の乱暴であるに比しては、稍神経質に過ぎて居る」とか、「心情表現は、野生人の心情としては、やゝ自意識が目立ちすぎ、観念的なきらいがある」（橋本直久）などの欠点が指摘できる。それは次のような村に入る場面の描写にも見出せるのである。

市街地のかすかな灯影は、人気のない所よりも却て自然を淋しく見せた。彼れはその灯を見るともう一種のおびえを覚えた。人の気配をかぎつけると彼れは何んとか身づくろひをしないではゐられなかつた。自然さがその瞬間に失はれた。夫れを意識する事が彼れをいやが上にも仏頂面にした。

これは、仁右衛門が小作人社会に「一種のおびえ」を意識する野蛮人であることを提示した部分に他ならないが、彼の反応の仕方は確かに野性的な人物にしては小心であり、意識的であり過ぎよう。この小心さを彼の持った性格と捉えることもできるが、むしろその矛盾した側面にこそ、主人公が人間である由縁があった。

彼は自然を耕作の対象とする時、その与えられた自然性を生かして「自然さ」に安住できる人物であった。しかし、その「自然さ」に自足する主人公を、彼の人間的実質だとは考えられていない。彼が人間社会に近付いただけで、その「自然さ」が失われたことを意識するという点で人間的なのである。それゆえ、自註において「一人の人間」であることが自然との関係を提示していたのである。すなわち、主人公が意識的な内面を所有する人間であるために、自然と対立し、そこに回帰することが許されなかったのである。

西垣勤氏は、自註に従った読みが成立しない根拠に「三章までにおいては、彼が『自然を征服して行く業に暗い』とは言い難く」と指摘する。「自然から今掘り出されたばかりのやうな」野性的な人物であれば、その自然性を力として生命活動に忠実であるだろう。しかし、仁右衛門の人間的本質は、自然を対象化する意識を所有する点にあった。つまり、自然を生命活動の対象として、人間の「非有機的な肉体」[18]とする普遍的な人間存在のあり様を、野性的な主人公も分有していたのである。有島の認識では、この自然と人間との関係は、自然を人格化してそれとの不断の争闘のイメージとして把握されていた。しかも、自然の「大きな力」に対して、人間はあまりに微弱な存在に過ぎない。にもかかわらず、人間は生命の資を求めて自然に挑むことを止めないという「一人の人間」の「運命」を仁右衛門もまた荷っていたのである。自註の真意は、そうした主人公の「運命」を見定めていたということであったろう。

このように、仁右衛門に仮託された〈自然人〉という観念は、社会との関係では、その自然性を否定的な契機として内在化させ、

自然との関係では、人間主体にとって対立的な自然を不可抗な実在として対峙し、争闘する宿命を課せられたということを意味していた。そして、自然も社会も主人公内部の二面性を分裂させる程の力を持たず、一方的な主人公の側からの対応が描かれてきたのが、西垣勤氏の指摘する三章までの構造であった。従って、その能動的な関係において、主人公はその自然性を自然に対して有効に発揮できたのである。しかし、それは一方的な関係の上に成立した危い安定期の所産であった。

三

四章冒頭に「春の天気の順当であったのに反して、その年は六月の初めから寒気と淫雨とが北海道を襲つて来た」という自然が描かれる。この予期せぬ自然の変調は、厳しい北海道の自然環境では珍しくはなかったろう。作者は、そうした事態を熟知した上で作品世界に機能させている。つまり、この現象は作中の対立的な自然の側からする対応を示していたのである。ところが、それは仁右衛門にとって、それまでの平衡状態が失われたことを意味していた。その自然の動きは、主人公内部の自然性と人間的側面とが統一を失い、乖離し始める予兆であったといえよう。

さらに、社会との関係でも、そうした徴候が周到に準備されるのである。天候の不順は、仁右衛門を陰鬱にし、馬車追いの仕事も奪ってしまう。彼は焦立った気分に支配され、自分の畑の中で見付けた佐藤の子供達を殴りつけ、さらに佐藤本人に制裁を加えるべく場主との会見場へ向う。そこで彼が耳にした「多い中ぢやに無理もないやうなものゝ、亜麻などを親方、ぎやうさんつけたものもあつて、まこと済まん次第ぢやが、無理が通れば道理もひつこみよるで、なりませんぢやもし」という笠井の偽善的な小作料軽減要求の言葉に、社会と仁右衛門との関係の変質が暗示されていた。約半年で、彼は村人から恐怖されるだけでなく、場規を逸脱した者と判断され、社会から締め出され始めたのである。が、彼はそんな村人の意向には無頓着であった。社会は彼にとって油断のできない「敵」であり、その中で自らの夢を実現する場としてだけ、彼は社会の必要性を認知していたからである。彼はその「あてこすり」に反発を感じながらも、最も弱い「敵」佐藤への暴行を予定通りに実行した。しかし、彼は社会との関係を、意外な形で実感させられるのである。子供と夫とを殴られ、傷つけられた佐藤の妻は、「怒精(ファーリー)のやう」に追って来て彼を罵倒した。

彼れの気分は妙にかたづかないものだつた。彼れは佐藤の妻の自分から突然離れたのを怒つたりをかしく思つたり惜んだりしてゐた。(略)仁右衛門の口の辺にはいかにも人間らしい皮肉な歪みが現はれた。彼れは結局自分の智慧の足りなさを感じた。而してまゝよと思つてゐた。

この自分の感情を摑みかねている彼に、内部の衝動のままに快楽に酔い痴れる激情家の俤はない。その鬱屈した気分は、それまで思ってもみなかった感情に彼が直面したことを語っていた。佐藤の妻との関係は、たとえ本能的な行動ではあっても、最低限の社会関係を実現したのである。しかし、仁右衛門はその関係に思い至ることも、ましてやそれが人間的な愛情に起因することも意

識されなかった。彼はその欲望の対象が失われ、内部の衝動が塞き止められて初めてその感情に気づくような人物であった。その愛情は、妻に対し示されたように(二章)、相手のことなど考慮せず、衝動的に発現するものであった。それは、仁右衛門が自然性を人間的な側面として持たなかった証拠である。彼の感情は、社会関係を前提として、それに付随するものとして造形されてはいなかったのである。

しかし、彼もここで人間関係の内部にあることを知る機会を設定された。彼の「人間らしい皮肉な歪み」を浮かべた表情には、そうした人間的な覚醒が秘められていた。ところが、彼はその喪失感を持続させることなく、「智慧の足りなさ」として回避する。覚醒は彼にとって、それまで内部で均衡していた自然性と人間性を分裂したものとして顕在化させることになる。それは、仁右衛門を規定する〈自然人〉という観念を逸脱させ、彼を人間の側に取り込むことを意味していた。彼にはその存立を危くするような問題に対面し続けることは不可能であった。が、妻が嫉妬すれば残虐なことをしかねない心を恐れる彼を点描することで、仁右衛門が以前の状態に安住できないことが示されるのである。

五章以降、異質な二重性に他ならない主人公内部の自然性と人間的側面との乖離が造形されてゆくのであるが、その形象化について、発表時から「児供の死が少しもエッフェクティヴに書けてゐない」[19]とされ、西垣勤氏も「赤ん坊の死後、この作はなだれを打つように『自然人』の『野生人』への変貌、その破滅へと、プロットの偶然にたよりながら、終結させられる」とその不徹底さを指摘している。確かに、仁右衛門の強暴な性格が原因で社会的に孤立し、また佐藤の妻の離反も彼の暴力行為が直接的な要因であったのに比して、五章以降の事件は偶然の契機によって惹起されている。しかし、それらの事件の発端を偶然と捉えるならば、佐藤の妻の離反も偶然性に支配された面を持つのである。彼が佐藤の子供を殴った理由は、「百姓の餓鬼だに畑のう大事がる道知んねえだな」という言葉で明白であるが、それは表向きのものであって、真の理由は、「何か思ひ切つた事をしてゞも胸をすかせたく思」う焦立ちであった。それは、天候の不順で仕事を奪われたことに起因していた。この自然の変調を周期的な北海道の気候だとは断定できない。そこに、恣意的な作為の跡を見ることもできるのである。

この偶然性に関して佐々木靖章氏の「この二つの事件を支配しているのは、〈自然〉の究極の支配者である〈神〉のごときものの力といってもよい」と、作者によって人為性が排除され、かわって「自然の因果律」が採用されたとする考察[20]は示唆的である。作中の自然は、人間と対立的な実在と自然を捉える作者の認識を反映して、主人公の人間的本質を提示する重要な要素であった。ところで、四章以降この自然は、主人公及び彼を含めた人間の存立を脅かす力として描き込まれる。四章冒頭の変調、五章「自然に歯向う必死な争闘の幕は開かれた」、六章「自然に抵抗し切れない失望の声が、黙りこくつた農夫の姿から叫ばれた」、七章「人間の哀れな敗残の跡を物語る畑も、勝ちほこつた自然の領土である森林も等しなみに雪の下に埋れて行つた」と、人間の側の敗北に

収斂する形で作品の骨格を形成していた。さらに、終末では「二人はそれらのものすら自然から奪ひ去られてしまつた」という印象的な一句が挿入されている。これらの表現は、この作品における自然の意味を端的に表している。自然を人格化して表現した作者にとって、作中の自然は単なる実在の域を越えて機能するものとして見なされている。自然に「力」を感受する有島にとって、作品構造の要所にそれを利用することは可能であった。作者は自然の側の反撃を設定することによって作品世界を構想していたのである。いわば「自然の因果律」に依拠して、それを統率する「神のごとき」視座から作品世界を俯瞰していたのである。それゆえ、自然を不可抗なものとする作中人物にとって偶然の契機といえども、「神」の位置にある作者には必然的な創作意識の反映であった。要するに、〈自然人〉として主人公を造形した作者は、彼の生の基盤を突き崩していたのである。

四

五章以降の主人公が追いつめられ窮迫してゆく過程を瞥見しよう。佐藤の妻を失うことで人間的感情に遭遇した彼は、さらに子供を死病に犯されるという不幸に遇い、子への愛情という「持つた事のないものを強いて押附けられ」困惑する（五章）。作者は、本来人間的でありうる〈自然人〉に人間性に開眼する契機を次々設定する。しかし、それは彼にとって「恐ろしく重い冷たい」現実を抱え込むことを意味した。彼はたじろぎ、必至に生きようとする赤坊のために、肉体的な優位を誇って軽蔑していた笠井を「拝むやうな」気にもなる。しかし、子供が死に、その死に直面し続けることもできず、彼は笠井への怒りに転嫁して元の強暴な〈自然人〉に帰っていく。

さらに、彼の人間的な夢を実現させる有力な道具であった逞しい馬を全くの偶然の事故で失ってしまう（六章）。この打撃は、笠井への怨憤で納得されるものではなかった。彼はそれを事実として認めることも憚られた。しかし、「つまらない現実」は石炭酸の芳香に甦り、彼は「互に憐れむやうに」馬とともに屈託する。この時、「自然の因果律」に自分も容赦なく排斥される宿命を彼が実感したかは不明だが、たとえ感じたとしても、その痛手から強暴な彼へ、与えられた〈自然人〉という観念を生きる他はなかった。しかし、その強暴性は確実に農場での孤立を促し、さらに小作料未納という場規違反によってそこから追放される彼の立場は決定していった。

こうして、仁右衛門は不可抗な自然によって内奥の人間的弱点を露呈させられ、その分裂に耐えられない彼は、逆に強暴性に居直ることで社会的な生活基盤まで失うという窮迫した境遇を強いられた。他の小作人は、同様に自然との戦いに屈服しても、社会的には存続しえる余地が残されていた（七章）。しかし、〈自然人〉として生きてきた仁右衛門には、その余地さえなかった。思い屈した彼が、「人間がよつて、たかつて彼れ一人を敵にまはしてゐる」と思うのも、その失意の深さを語っている。これは落魄した野生人の被害妄想などではない。彼は、他の村人と自己との根本的な相違を、それまでとは逆転した立場で見たのである。この時の彼

には、〈自然人〉であることが、負い目として感受されていた。しかし、まだ農場にあって、与えられた自然性を生かして実現する夢に固執する彼は、そこに居続ける可能性だけでも確保しようとした。少なくとも生活できる場を求めて、彼は〈自然人〉という存在性を放棄して、村人同様の〈人間〉になろうとしていたのである。「彼れは場主と一喧嘩して笠井の仕逐せなかつた小作料の軽減を実行させ、自分も農場にゐつゞき、小作者の感情をも柔らげて少しは自分を居心地よくしようと思つた」という場主訪問の動機には、知らずにその宿命を逸脱した〈自然人〉の悲劇が隠されていたのである。

この場主訪問の場面は、著作集で最も改稿増補された部分である。初出誌では、この部分は、地の文で極く短かく扱われるだけだが、著作集では量的に増えたばかりでなく、内容的にも主人公の「打摧かれ」る様相が徹底した形で書き込まれている。たとえば、改稿で、次のような場主像の変貌がもたらされている。

主人は頭から彼が小作料を一文も納めず、場規を守らない事を責め立てた。根性のすはり処をなほす積りで帰つたらすぐ退場しろと申渡した。（初出本文）

「小作料の一文も納めないで、どの面下げて来臭つた。来年からは魂を入れかへろ。而して辞儀の一つもする事を覚えてから出直すなら出直して来い。馬鹿」（改稿本文）

初出の頭ごなしに退場を迫る場主は、村人や帳場などと変らない人物であり、仁右衛門を威圧する存在にはなりえない。しかし、彼が夢を奪取する武器とした自然性を矯正し、村人同様の〈人間〉になって出直せと語る場主は仁右衛門より一回り大きな人物であった。場主は彼の訪問動機が彼に持つ意味を洞察していた。つまり、仁右衛門が農場に居続けるためには、〈自然人〉であることを止め、その夢も持てない隷属した〈人間〉に甘んずる必要があった。人間的な夢に固執して、盲目的に生活の場を確保しようとした彼は、知らずに求めていた結果がどんなことであったかを、他ならぬ場主に思い知らされたのである。それゆえ、「彼れには農場の空の上までも地主の頑丈さうな大きな手が広がつてゐるやうに思へた」（増補文）のである。このように場主を変貌させることで、仁右衛門の「すつかり打摧かれる」思いはより正確に掌握できる。あくまで作者は、彼に負荷した存在性の行方を見定めようとしたのである。

従って、「何んといふ暮しの違ひだ。何んといふ人間の違ひだ」という彼の鬱屈した思いに何ら批判的な意図はなく、作品内部で照応していたのである。彼は危く自己の存在自体を否定しようとしていたことを、場主によって自覚させられたのである。それは彼に夢の断念を強いるものであり、彼は村人や場主とは異質な、転換しえない宿命を負った存在であることを確認しなければならなかった。彼が「自然から今切り取つたばかりのやうな」自己の存在性を、逃れられない宿命として感受していたゆえに、この言葉は「空しい」[21]のであった。彼は、自らの人間的脆さを葬るごとく馬を殺し、「長い苦しい漂浪の生活」に生きることを決意する。たとえ社会的に抹殺されようとも、生きるとは宿命に生きる外にどんな道も彼は所有していなかった。彼は不可抗な力に圧され

て、内部の分裂という危機をその宿命に従うことで生きてきた。決して彼は自己の生を懐疑することなどなかった。それゆえ、彼の存在は強烈な印象を与えるのであるが、たとえその宿命が開示されようとも、それに絶望することなどなく、苦しい生をしか招来しない宿命を受容していったのである。このように、〈自然人〉として否定的に決定付けられた形象は、最後までその生の情熱を絶やすことなく、その否定性を生き抜き、消えていったのである。こうして「彼は人間と融和して行く術に疎く、自然を征伏して行く業に暗い。それにも拘らず彼は、そのディレンマのうちに在つて生きねばならぬ激しい衝動に駆り立てられる」という作者の言葉は作品形象に実現されたのである。

有島がこの作品に表出した認識は、「私はあの作のうちに、人間の已むに已まれぬ生に対する執着の姿を見て貰ひたい」という表現で明白である。大正二年「或る女のグリンプス」を中絶させた彼は、大正四年妻の病気によって上京し、翌年教職を辞して文学的生活に専念する。しかし、大正五年、妻を失い、続いて父の死に遇う。その体験は、永遠に人間の意識を拒絶した死の実相を有島に告知したろう。第一著作集が『死』と名付けられたのも象徴的である。この人間が自然存在であるかぎり避けられない死を、自然なものとして受け入れるのではなく、意識によって対象化したならば、それは人間に死を迫る運命の仕業と感受されただろう。

我等が歩いて行く到達点が死である事を知り抜きながら、なほ力を極めて生きるが上にも生きんとする矛盾ほど奇怪な恐ろしい矛盾はない。

（「運命と人」、大正七年十月『中外』）

と、有島は死を負った人間の生存を「矛盾」と表現する。死を意識化した人間にとって、生は「矛盾」以外の何物でもなく、彼は何者かに生かされる存在なのである。この「矛盾」を具象化するものに、自然の力に比して弱者でありながら、自然から生の資を奪取する人間の様相が考えられる。まさに、農夫こそ有島の生存認識を体現する格好な形象であった。

仁右衛門はこうした農夫であると同時に、社会的な生存も許されない苛酷な存在性を負荷された〈自然人〉であった。作者によって、彼は全く否定的に造形され、しかも内なる自然性として強烈な生衝動を所有していた。このため、彼はその否定性を生かされるが、しかしその生を途中で放棄することも、「矛盾」と感じることもなく、過酷な生に耐え抜くのであった。作者は、主人公のそうした宿命を知悉して、彼に「試練」[22]を与え、生存の場を奪ってもなお宿命を生きる彼の生を、自然に依拠して客観的に描出したのである。

このように、作者の生存認識は、宿命を操るものと操られるものという二極を持つ構造にまで解体されないかぎり表出できなかった。この作品内部の自然の機能と〈自然人〉という形象は、それぞれに対応し、客観的な構成は、その認識を虚構化するための必要条件であった。そして、こうした作品の内部構造は、そのままそれを造形する作者有島自身の生存の様態でもあった。その意味で、有島は「自己を描出したに外ならない」のであった。

注

(1) この作品のテキストは、有島武郎著作集第三輯『カインの末裔』所収の本文を使用し、適宜初出本文を参照した。その他日記、書簡からの引用は新潮社版全集に、評論、小説は初出本文によった。

(2) 田中純はこの作品を「純粋に客観的な描写の分量の勝つた作品」(「有島武郎氏の文章」、大正七年四月『文章倶楽部』)と捉え、木村毅は「有島武郎論」(大正七年七月『新時代』)で「自己の生活と全然縁のないものを材料とした物」に分類し、宮島新三郎も「有島武郎論」(大正八年二～三月『早稲田文学』)で、その分類を踏襲している。その他、中村星湖「有島武郎氏の作品」(大正六年七月三～五日『時事新報』)、田山花袋「谷合の碧い空」(大正六年八月『文章世界』)、石坂養平「大正六年文壇の回顧」(大正六年十二月『文章世界』)などでは、それぞれこの作品を客観的な写実作品と見て、その観念的な性格を指摘している。

(3) 『有島武郎論』(昭和四十六年六月、有精堂刊)所収「『カインの末裔』について」以下、西垣勤氏の見解はすべてこの文による。

(4) 山田昭夫『有島武郎集』(昭和四十五年三月、角川書店刊)注釈

(5) 渡辺凱一「『カインの末裔』論」、昭和四十九年十一月『文芸埼玉』

(6) 本多秋五『白樺派の文学』(昭和三十五年九月、新潮社刊)所収「有島武郎論」

(7) 南部修太郎「カインの末裔」、大正六年八月『三田文学』

(8) 仁右衛門は春の息吹に包まれ、「物なつかしいやうなやごやかな心」になり、「不思議な幻覚に陥りながら淡くほゝゑんだ」とされる。

(9) 「『かんかん虫』から『カインの末裔』へ」、昭和四十七年十一月、右文書院刊『有島武郎研究』所収

(10) 福田準之輔「有島武郎文芸の形成—『カインの末裔』の意義」、昭和四十三年五月、桜楓社刊『日本文芸の世界』所収

(11) 「此の頃の作品」大正六年七月六～十日、『時事新報』

(12) 「仁右衛門(『カインの末裔』)について—農村小説における人間造型」、昭和四十年三月『国文学攷』

(13) 「『カインの末裔』の成立過程試論」、昭和四十二年三月『同志社国文学』

(14) 「教会退会後の自然観をめぐって」、昭和四十九年六月、桜楓社刊『有島武郎の文学』所収

(15) 明治三十九年十二月二日英文日記

(16) たとえば、留学中にそれを求めれば「秋の夕は実に悲哀美の極地なり。見るに悲しけれども眺め入る中に身は涙の中に溶ける様になりて唯何とはなき美感しみじみと心を衝き来るなり。痛みを持てる人の心には、秋ほど優しき同情もてるもの後世にある可しや」(明治三十六年十月二十七日)などに見られる。

(17) 中村孤月「七月の文壇」、大正六年七月十一日『読売新聞』

(18) マルクス、城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』

(19) 江口渙「有島武郎論」、大正七年四月『文章世界』

(20)「『カインの末裔』試論」、昭和四十九年八月、有精堂刊『白樺派の文学』所収

(21)「『カインの末裔』の意義」、昭和四十六年九月『日本文学』

(22) 長谷川泉「『カインの末裔』」、昭和二十九年十二月『解釈と鑑賞』

新刊紹介

深沢忠孝著

『詩人草野心平の世界』

つい最近、日本近代文学館から『銅鑼』という名の十六冊の詩雑誌の複刻版が出た。草野心平が中国で創刊した、一部ガリ版印刷を含む雑誌だが、そうした手づくりの誌面を見ていると詩人たちの内部からわき起こる精神のはりのようなものを感じざるを得ない。そうした側面を見落した平均的な作品研究が、人々の心に訴えないのはいうまでもないだろう。「その道程と風土」と副題の付された本書は、詩人でもあり古代文学研究者でもある著者が、そうした意識の上に立って同郷の詩人の全体像を描こうと努力したものである。

蛙と富士山の詩人として一般に知られている草野心平の隠された核・原点を、詩人のこれまでの道程をたんねんに辿ることによって見つめようとしている。著者の眼はあくまでも詩人のエネルギー、「志」の詩人ともいえる心平の多様な精神発現の様相に向けられているようだ。評伝形式をとりつつも、時には人物関係に筆を及ぼしたり、詩以外の心平の表現の試み（絵画・書など）を跡づけたりする柔軟な筆運びにも注意したい。未発表日記を含む新しい『草野心平全集』（筑摩書房）がスタートした現在、この小著は心平理解へのうれしい指針となろう。

（昭53・2　福島中央テレビ刊　新書判二四六頁、六八〇円、発売＝福島県図書教材〈福島市舟場町一―二七〉）